乳児と保育者のかかわりに関する考察（1）

— 行為の両極化と心的芽生えを支える保育者のかかわり —

○白井潤子・西山 梢・堀江直子・氏原雅子・石井博子・寺見陽子
（ 部 島 東 保 育 園 ） （神戸親和女子大学）

I. 研究の目的

乳児期は人間としての生物学的基礎のできる時期である。乳児は未熟であるが、運動・感覚を用いて外界を認知し心の世界を作り始める。その乳児の心の世界を形作る契機は、保育者の何気ない行為による心地よいかかわりの中にある。本研究は、保育における何気ない保育者のかかわりが乳児の心的芽生えとどのように関連しているか、かかわりの中で見せる乳児の行為の意味を探りながら考察し、乳児の心の育ちを支える保育者のかかわりについて検討することが目的である。

II. 研究の方法

保育記録事例の省察と解釈による。

III. 事例と考察

【事例1：「入る」と「出る」】

T真（12カ月）、最近ロッカーの戸を自分で開けるようになり、この日もロッカーを開けたり閉めたり、中を覗いたりしている。空のロッカーを開けて中に入ろうとする。うまくロッカーの中へ体ごとすっぽり入る。戸は開いたままなので私と「ばあ〜」と遊んで喜んでいる。N美（2歳1カ月）がロッカーの中に入ったT真を見て戸を閉めてしまう。私が戸を開けると中には表情の固まったT真がいる。N美に再び戸を閉められ、今度は中から戸の穴に手を入れて自分で開けようとしている。中は暗いが、側に誰かがいるという安心感か、自分でも開けることができると分かっているからか泣かない。その行為を3〜4回繰り返す。

◆閉じた空間に入り込む—肉体的自己存在を経験する

子どもは開けたり、閉めたり、隅っこに行つて狭い空間に入り込むことが好きである。胎内に似ているからなのか、周りが見え隠れするのが面白いからなのか、閉じられた空間に興味を示す。こうした行為によって、子どもは自分自身の肉体的存在を確認しているように見える。出たり入ったりして感じられる身体的感覚で自分の大きさの空間を感じ取り、入ったところから出てまたもう一度入っていくとき、自分のいた空間を外から見て自己身体空間を視覚的に捉える。自分の大きさに合うところが一番心地いいことを知り、自分自身の形やサイズ、肉体的存在性を体感することができる。「出入りする」ということが、感覚的に自分と言うも

のを別の視点で見るという経験の場になる。T真が、入ったけれどなかなか出ようとしなかったというのは、何か、自分の思いがそこにすぽんと入り込んだ空間の安定感が感じられ心地よさがあったからであろう。体がすっぽり入っただけでなく、戸を閉められて、ちょうど自分にぴったりの空間を得た。開けようとしても開けられず戸惑いもあったろうが、泣かずにいたのはそれが面白い経験だったからだろう。出たり入ったりする、ものを出し入れする、引き出しを開け閉めする、という行為を繰り返すのは、自分の世界の延長として外に広がる世界を閉じる、区切りを作る、ある秩序を作るといった意味があるのではないだろうか。繰り返される行為は、子どもが、今発達しつつある身体の動きのパターンと合致したものになっており、その行為の向けられる方向は見えない世界への挑戦である。開けたり閉めたりは、ちょうど発達し始めた手足を使い「行って帰ってくる」帰着を楽しむ行為であり、入り込むというのはハイハイして入っていく行為であり、生活の中で閉じられた空間を作り、楽しむことである。こうした子どもの行為からくる内的な体験が、子どもの心の存在をつくる原形になるのではないだろうか。乳児の心的世界が芽生える第一歩と言えよう。

【事例2：「はじめ」と「おわり」】

延長保育のお迎えが一段落して私が座ると、M（1歳3カ月）がすっと寄って来る。膝に座ろうとしたが、エプロンの胸についていたキリンのアップリケが気になる。ミニカーを持っている手でそのアップリケを触っているうち、エプロンの襟ぐりの中にミニカーが入ってしまう。「あっ」と私が言うとキョトンとする。私は立ち上がってエプロンの裾からミニカーを落とす。Mは襟ぐりを見つめたまま、床に落ちた音でミニカーが出てきたことに気づき、すぐそれを拾い上げる。私が座るとすぐ、襟ぐりにミニカーを入れる。今度は立ち上がらないで座ったまま「タツカ、タツカ…」と言いながら裾をめくると、にっこり笑って待っていましたとばかりに見えたミニカーを取る。このやり取りを繰り返す楽しむ。

◆「いま、ここ」の世界から「次に、くる」世界を作る
— 行為の主体、因果の起点としての自己を経験する —

Mは、持っていたお気に入りのミニカーが突然無くなり、何が起きたのか理解できず戸惑いを見せる。保育者はエプロンの裾から出てくることを知らせようと立ち上がってミニカーを落とすが、Mがそれを理解するには幼く未熟で、ミニカーが消えたエプロンの襟ぐりから目が離せない。保育者のかかわりによって、床に落ちた音によろしく、襟ぐりから目が離れ、ミニカーが現れたことに気付く。そして、今度は意図して襟ぐりにミニカーを入れ、繰り返し楽しむ。偶発的で断片的な乳児の経験が、保育者とのかかわりの中で繋がられ、現実の変化への気付きが生まれて、今、ここに生きる乳児の内的世界に先への予期が生まれる。自分の行為が環境に変化を生む経験は自己に能動的存在感を与えるが、それを保育者とのかかわりの中で乳児は発見していく。行為して変化が返ってくるから、その繰り返しの中で自分が環境的变化の起点になっていることを知る。保育者のかかわりによって自分の世界に連続性が生まれ、自分が世界の中心であり、周りとの関係を作っている存在なのだということを体感する。乳児の自我は、こうした環境との関係から芽生える。

【事例3：「ある」と「ない」】

プレイルームでままごとをして遊んでいる。R男(1歳8カ月)が、中にご馳走が沢山詰まっているティーポットを私に差し出す。私は中の物を出してほしいのだなと思い全部出し、取り出したご馳走をR男に「はい！」と言って渡す。R男は、私の手からティーポットを取り、一個ずつポットの中に入れようとする。一個入れ、それが中に入ると「アハハ〜」と嬉しそうに笑い、私の顔を見る。続いてもう一個のご馳走をR男が中に入れようとする瞬間に、私が「ポーン」と言うと、R男はポットに入れかけていたご馳走を急に取り出し、「ボン」と言いながら、ボールを投げるようにとばす。そこで今度はご馳走を入れようとするときに「ナイナイ〜」と言うと、ポットに入れてさっきと同じように喜んで笑っている。もう一度、ご馳走を入れようとする瞬間に「ポーン」と声をかけてみる。きつと投げるだろうなと思っていたら、案の定投げる。

◆言葉とイメージ「存在すること」の意味を経験する

R男がポットを差し出したのは中のご馳走がつかまって自分の力で取るができなかったからである。R男がどう遊ぶかはその時は予測できなかった。出してと言ったので、コップにジュースを注いで飲む真似をするなど違う遊び方をするのかなと思っていたが、す

くにご馳走をポットに入れた。私が出すのを見ていたから今度は自分で入れてみようと思ったのか、空になったポットの入れ口の穴にもものを入れることを楽しむ。R男がご馳走を入れる際、ものが入ったときになる音を予想し、効果音のつもりで「ボン」と何気なく言う。私の「ボン」という言葉かけから投げるという行動がイメージされ、手に持っていたご馳走を投げたのであろう。

【事例4：「動く」と「止まる」】

0. 1歳児が数人好きなあそびをしている、ゆったりとした時間である。プレイルームでぼんやりと座って、指吸いをするR男(1歳8カ月)の姿を見つけた。私はR男の背後にまわっていつものように鼻をつまむ。機嫌が悪いと手を払いのけられてしまうが、この日は機嫌も良く、鼻をつまんでいる私の腕に頭を預けていた。R男が吸っている指を抜いたので、頭を預けている腕の力を抜いて頭を倒し、床ギリギリで受け止めた。頭を持ち上げて元の姿勢に戻すと、R男はニヤリと笑う。すると、R男自身が自分から不意に頭を床に傾けたので、私は再び床ギリギリの所で頭を受け止める。姿勢に戻すとすぐにまた頭を倒す。時には勢いをつけて倒してくる。頭を持ち上げる間をゆっくりしたり早くしたりしながら、何度も同じことを繰り返す。

◆楽しみを作り出す一快を求めて行為する能動性

R男は私の存在に最初気付いていない。背後から保育者が近づいたので頭が腕に当たり、頭を預ける格好になる。安心して預けていたのに、急に腕の支えがなくなり一瞬ドキッとしたかもしれないが、頭を受け止められたことで味わったスリルを楽しいと感じたようで、ニヤリと笑いまた頭を倒して保育者に自分を受け止めてもらおうとする。予期があり、試している。予期の通り受け止められたことで安心して楽しみを求め堪能する。頭を持ち上げてもらえるのが、倒した直後だったりもう起こしてくれないのかと思うほど待たされながら、今度はその間も楽しみ頭を倒すことを繰り返す。

IV. まとめ—乳児の心を育てるかかわりを考える

子どもの自我の基盤となる心的芽生えは、乳児期に自己の内と外の存在を体感することから始まる。それは、身体行為に両極化が意味づけられ体感される。乳児の行為に連続性を与え、行為の結果と帰結を作って、その行為の流れに意味を付与する大人のかかわりが必要である。こうした視点から、乳児の行為の意味と育ちを読みとり、乳児の今の欲求を満たすかかわりが重要である。